22140115

International Baccalaureate®
Baccalauréat International
Bachillerato Internacional

JAPANESE A: LITERATURE – STANDARD LEVEL – PAPER 1
JAPONAIS A : LITTÉRATURE – NIVEAU MOYEN – ÉPREUVE 1
JAPONÉS A: LITERATURA – NIVEL MEDIO – PRUEBA 1

Friday 9 May 2014 (morning)
Lundi 9 mai 2014 (matin)
Lunes 9 de mayo de 2014 (mañana)

1 hour 30 minutes / 1 heure 30 minutes / 1 hora 30 minutos

INSTRUCTIONS TO CANDIDATES

- Do not open this examination paper until instructed to do so.
- Write a guided literary analysis on one passage only. In your answer you must address both of the guiding questions provided.
- The maximum mark for this examination paper is *[20 marks]*.

INSTRUCTIONS DESTINÉES AUX CANDIDATS

- N'ouvrez pas cette épreuve avant d'y être autorisé(e).
- Rédigez une analyse littéraire dirigée d'un seul des passages. Les deux questions d'orientation fournies doivent être traitées dans votre réponse.
- Le nombre maximum de points pour cette épreuve d'examen est *[20 points]*.

INSTRUCCIONES PARA LOS ALUMNOS

- No abra esta prueba hasta que se lo autoricen.
- Escriba un análisis literario guiado sobre un solo pasaje. Debe abordar las dos preguntas de orientación en su respuesta.
- La puntuación máxima para esta prueba de examen es *[20 puntos]*.

© International Baccalaureate Organization 2014

https://xtremepape.rs/

次の文章と詩のうちどちらか**一つ**を選び、設問に沿って分析し、解説文を書きなさい。その際、二つある設問の両方に必ず答えること。

1.

私は神戸の西部、新しく山を開いた住宅地に住んでいる。したがって、わが家の下はすぐ岩である。乾いた「清潔」な岩がじっと地殻の奥まで続いているのかと思うと妙な気がする。（略）

私はここに移り住んで三年目になるのだが、京都、東京、名古屋のそれぞれ三年目と比べると、家に三年分の馴染（なじ）みが出来ていないことに気づく。（略）

どうも欠けているのは匂いであるらしい。そういえば、ついこの間まではどの町でも訪問する家ごとに少しずつ違った独特の匂いがあった。しっとりと、あるいはひんやりと、あるいはじめっと、あるいはそれらの混合に一種のさわやかさに似たものが混じった古い日本家屋の匂い―それが欠けているのであろうと思い当たった。

あの匂いは水洗便所の普及とともに薄まったと思っていた。だが、どうも汲み取り便所から来るものだけではなさそうである。あれは、その家その家にいりこんでいる茸（きのこ）やカビのたぐい、そしてそれの作るいろいろなものの匂いがベースになっているのではあるまいか。

カビや茸が家に付くのは建築上困ったことである。最近のマンションでもこれを防ぐのは難しいらしい。壁紙の裏などにべったりカビがついている。廃屋になると、たちまちキノコが垂木（たるき）やかまちに生える。ところが、この一帯だけか、あるいは神戸西部から瀬戸内の特徴なのかはまだ詳（つまび）らかにしていないが、フロ場なども、しばらく窓を開けて置くと床のタイルまでさっと乾いてしまう。家の主は何十年来馴染みのミズムシを飼っているけれども、これは五代くらい前の棲み家で飼い始めたものだ。これを例外とすれば、最近出来の大きなビルの中でも微かに匂うのを感じるカビ・キノコの匂いがしないのである。

これは建築学的にはたいへん結構なことで、持主も建物の保守上歓迎しているのだけれども、それはカビや茸が建築だけでなく、生あるもの、形あるものを崩してゆくものだからで、こちらの都合としてさしあたりあまり活動してもらっては困るというだけである。もっとも、カビや茸が無かったら、生物の死骸や無住の家がそのまま残って無残なものだろうから長期的な問題としては別である。私としては、折角の家が今すぐ無に帰しては困るのでカビや茸を敬遠するだけのことである。

ここで思い当たったのだが、カビや茸の匂い―これからまとめて菌臭と言おう―は、家への馴染みを作る大きな要素だけでなく、一般にかなりの鎮静効果を持つのではないか。すべてのカビ・キノコの匂いではないが、奥床しいと感じる家や森には気持を落ち着ける菌臭がそこはかとなく漂っているのではないか。それが精神に鎮静的にはたらくとすればなぜだろう。

https://xtremepape.rs/

菌臭は、死ー分解の匂いである。それが、一種独特の気持ちを落ち着かせる、ひんやりとした、なつかしい、少し胸の広がるような感情を喚起するのは、われわれの心の隅に、死と分解というものをやさしく受け容れる準備のようなものがあるからのように思う。自分の帰ってゆく先のかそかな世界を予感させる匂いである。（略）

菌臭の持つ死ー分解への誘いは、腐葉土の中へふかぶかと沈みこんでゆくことへの誘いといえそうである。こういう死の観念のない世界がいくらでもある。ロメオとジュリエットの墓は、収納ケースのたくさんある地下室である。カヴァフィスの詩に出てくる墓もジャスミンとバラあるいはスミレに埋まる石室である。そこでは死体は乾いてミイラになるのであろうが、さらに砂漠の中での徹底的に乾燥した死となると、これは実にわれわれから遠い。旧約やイスラムの死とはそういうものだろうが、私などがあの苛烈な宗教に馴染めないとしたら、死にまつわる匂いのこの違いも一役買っているかもしれない。われわれの宗教は、逆に菌臭のただよう世界にしか安住できないのかもしれない。神道が、すでに、森の奥の空き地に石を一つ置いたものを拝むところから始まっている。樹脂と腐葉土の匂いの世界を聖としたのである。

（中井　久夫「きのこの匂いについて」『キノコの不思議』一九八六）

（注）

垂木　屋根板を支えるため、棟から軒に渡した木

かまち　床の端に渡す横木

カヴァフィス　ギリシャの詩人

（a）　この抜粋文における匂いの重要性について解説しなさい。

（b）　この文章の文体の特色とその効果に着いて述べなさい。

Turn over / Tournez la page / Véase al dorso

https://xtremepape.rs/

2.

誕生日

五十歳の誕生日を
ぎっくり腰で寝て暮らした
外ではブルドーザーの音が響き
遠くで子供の声がする
時々犬が吠える
遠い世界

枕元に
一冊の新しい僕の詩集がある
友人や知己の
あたたかいことばにつつまれて
そこにかるがると
僕の一生がある

それがどんなにみじめで
それがどんなに心貧しくても
それは僕の一生なのだ
それ以外に僕の一生はない
だがいまは
そこにそれがあるだけでこころが重い

こころが
ちりぢりにちらばり
世界の騒音のなかに
まぎれこんでいったら
そうしたら
どんなにせいせいすることか

https://xtremepaper.rs/

武蔵野の雑木林を歩き疲れて
一本の酒と一椀のそばに
われを忘れる
そんな具合だったら
どんなにいいか
ぎっくり腰で寝ている誕生日

（『定本黒田三郎詩集』所収（羊の歩み）一九七一）

（a）詩人はどのような思いで自分の人生を見つめていますか。

（b）この詩の表現上の工夫を指摘し、その効果を述べなさい。

https://xtremepape.rs/